

保育者の「学習」のための経験の諸相

—国内学術誌の先行研究レビュー—

垂見 直樹

The Process of Nursery Teacher's learning through Experience —A Literature Review—

Naoki Tarumi

Abstract

The purpose of this paper is to review previous domestic studies on childcare experience and learning. It is examined the achievements of research on in-service experience and learning of Japanese nursery teachers and future research in this field.

The target is peer-reviewed papers published in domestic academic journals since 2000. As a result of the analysis, the main themes in the research so far were: (1) experience regarding the difficulty of Japanese nursery teachers, (2) reflection, and (3) the role of coworkers. Overcoming difficult experiences is an important trigger for the growth of nursery teachers. In addition, it was confirmed that the quality of reflection is also important, and that the presence of colleagues (especially for newcomers) is important as a condition to support them.

Keywords:

nursery teacher, experience, nursery teachers' learning, literature review

1. 問題と目的

1-1. 背景と視座

Avalos¹⁾は、2000年から2010年までの教師の専門性開発（professional development）の先行研究レビューにおいて、「核にあるのは、専門性開発とは、教師の学習、学び方の学習、そして、子どもの成長という利益のために、知識を実践に変えることであるという理解」としており、専門性開発の核として現職教師の学習を挙げている。保育者においても、現職教育段階における職業生活の中で成長・熟達する過程の分析が求められるといえる。

保育者の成長は、保育者養成校における養成段階と、保育者としてのキャリアをスタートした後の現職教育の段階に区分できる。保育士試験合格者のように、養成段階を経ずに、キャリアをスタートするケースもあるが、いずれにせよ現職保育者としての経験を通して、保育者は成長する。したがって、保育者がどのような過程を経て成長するかを明らかにす

ることは、重要な研究課題であるといえる。

それらの知見は、保育者キャリアアップ研修の有効なプログラム構築や、成果検証といった実践的課題にも関連する議論である。「どのような経験によって保育者は成長するのか」「成長を促進／阻害する条件は何か」を明らかにすることにより、保育者の成長過程に必要な要因や条件を抽出できれば、間接的に保育の質向上に寄与し得る。

松尾²⁾は、「経験によって、知識・スキル・信念に変化が生じること」を学習と捉えている（学習の条件としての経験）。本稿ではこの枠組みに基づき、保育者が現職経験段階を通して「知識・スキル・信念に変化を重ねる過程」を学習の過程と捉える。そして、保育者がそのキャリアを通じて学習を累積することにより、変容しつづけるものとする。したがって経験は学習に先んじて生じることが前提であり、学習は経験の結果として事後的に確認されるものとする。

松尾は、経験を「外的経験」（関与する事象の客観的特性）と「内的経験」（関与する事象を理解し解釈する）に区別している。前者は、「経験したことがない部署へ移動したり、新しい方向性を構築することをミッションとする職務を任されたり、責任が重く難易度の高い職務を与えられたり、プロジェクトやタスクフォースのような短期間の課題に取り組んだ」経験や、「事業場の失敗やミス、降格、みじめな仕事、逆境にあるビジネスの従事といった苦難の経験」などの「タスク（課題）性質」である。一方後者は「学習者がそれをどのように理解・認識したか」を意味している。

また現職教育の経験には、学習する主体を取り巻く環境が影響すると推測される。福島³⁾は一般的な組織における「現場学習」の困難について、学習には「猶予」が必要だが限定されていること、そして失敗のコストを恐れ、組織が新人に仕事を任せないことで新人にとっての学習の機会が失われていることを指摘している^{注1)}。

この指摘と同様に、日本の多くの保育者も、猶予のない労働環境におかれている可能性がある。人員にゆとりのある保育現場と、そうでない現場とでは、保育者の経験に質的な差異が生じ、結果として職場における学習にも異なる影響を及ぼすことが予見される。例えば、危機管理上合理的だとしても、保護者とのトラブルを避けて、新人保育者による保護者とのやりとりや、担任を任される機会が制限されることも想定される。

このように、保育者の所属する園の方針や人員配置の状況などの環境的諸条件により、個々の保育者の経験は大きく異なり得る。したがって、保育者の経験は、その前提としての環境条件を考慮する必要があるといえるだろう。

また先に引用した松尾は、IT技術者や営業職・コンサルタントは「目標達成志向と顧客志向の信念のバランスを保つとき、経験から多くのことを学習する」と指摘している⁴⁾。これは、経験による学習が、学習者の信念などの、個人条件にも影響されることを示している。環境条件に加え、保育者の信念傾向などの個人条件も同時に考慮する必要があるといえるだろう。

ここで述べた外的／内的経験と経験の条件とは、相互に独立した別個の対象ではない。

例えば、「若手時代に責任のある仕事を任せてもらう経験」は、そのような仕事を若手に任せようという園の方針（環境条件）のもとで成り立っている。両者は、学習の当事者である保育者の視点からみるか、客観的な視点から捉えるかの違いであり、実際には1つの事象を異なる視座から記述しているに過ぎない。あくまで便宜的な区分として、経験の性質とその条件という視座を提示しておきたい。

1-2. 目的と意義

日本の保育者は、どのような経験を経て成長するとされているのか、またどのような条件が重要とされているのだろうか。本稿では、この問いに関連して、現在の研究の到達点を明らかにするために文献レビュー（literature review）を行う。保育者の経験による学習をテーマとした国内の研究を抽出し、その動向を分析する。国内研究の主要テーマや萌芽的段階のテーマを析出する。また分析結果を隣接分野や海外の研究動向を参照しつつ検討することで、未着手の課題を可視化することも可能となる。

本稿の学術的意義は、保育者の経験と学習に関する後続の研究の指針となるという点である。また同時に、保育者の現職教育に応用することにより、保育者の経験と学習にとって有用なエビデンスを提供できるという実践的な意義を有すると考えられる。

2. 対象と方法

文献レビューでは、分析の対象とする先行研究を選定する基準を明示しておく必要がある。

高濱⁵⁾は、熟達化という概念で保育者の学習過程を分析し、保育者が経験年数により、豊富な構造化された知識を有するようになることを明らかにした。この点で重要な先行研究である。しかしこの時点では、そこで得られる「構造化された知識」が、どのような具体的経験を通して得られるのか、あるいはいかなる条件の下で促進／阻害されるかについては、未解明の要因が多く残されていた。本稿では、同研究を保育者の「経験による学習」をめぐる研究の先駆と位置づける。そして、本稿で分析対象とする研究は、同研究が出版された2000年以降に出版されたものとする。

本稿で分析の対象とするのは、以下の条件をすべて満たす論文に限定する。

- ①日本国内の査読制度を持つ学会誌に掲載された原著論文であること
- ②2000年以降に出版されていること（2020年5月まで）
- ③保育所・幼稚園・認定こども園における、現職の保育者（幼稚園教諭・保育士・保育教諭）の経験を研究対象としていること
- ④保育者の経験と学習との関連を実証的に明らかにすることが志向され、経験的データの分析がなされていること

分析対象とする論文の選定には、国立情報学研究所（NII）が提供する論文データベース

サービスである Cinii Articles (サイニィ) の検索機能を利用した。Cinii での検索では、保育学研究 (日本保育学会)、乳幼児教育学研究 (日本乳幼児教育学会) の 2 誌は、2000 年以降の目次を手掛かりに対象候補となる論文を抽出し、通読した上で、上記基準に従い対象論文を選定した。また、Google scholar において「保育者」に続けて「経験」「体験」「成長」「学習」とそれぞれ入力して検索し、それぞれの検索結果の上位 500 本の論文 (関連性検索) から、上記基準に基づいて対象とする論文を選択した。それらの研究において参考文献として挙げられているものの中で、上記基準を満たすものも加えて、分析の対象とした。結果、22 本の論文^{6) ~27)} が抽出された (表 1)。なお、すべて 2020 年 5 月時点におけるデータを利用している。

表 1 分析対象の論文リスト(併2)

著者	年	論 文 題	掲 載 誌	キ ー ワ ー ド
1 高濱 6)	2000	保育者の熱達化プロセス: 経験年数と事例に対する対応	発達心理学研究	難しい経験 経験年数 熱達化 手がかりとこつ
2 上田・澤田・赤澤 7)	2007	子育てをすすめる保育者の仕事と家庭の関係 —とくに子育てが保育力量に及ぼす影響について— —保育者が保育のゆきつまりを乗り越えるとき—	乳幼児教育学研究	保育力量 子育て経験 相互の支え合い 保育のゆきつまり 連携 協働
3 野本 8)	2008	—保育実践における保育者相互の支え合いの意味— —専門家としての保育者集団の発達を支えるもの—	保育学研究	保育者の相互支援 外部機関 保育者集団
4 太田 9)	2008	—地域子育て支援活動の取り組みにみる保育者の相互支援—	保育学研究	保育者アイデンティティ 危機体験
5 足立・柴崎 10)	2009	保育者アイデンティティの形成と危機体験の関連性の検討	乳幼児教育学研究	省察 新人保育者 保育者間の話し合い カンファレンス 新任保育者 先輩保育者
6 金 11)	2009	新人保育者による省察の意味とその変容を支える支援のあり方 —保育実践後の保育者間の話し合い対話の中から—	保育学研究	
7 溝口 12)	2009	新任保育者の保育実践における課題意識と省察に関する研究 —保育カンファレンスの分析を通して—	教材学研究	
8 山川 13)	2009	新人保育者の1年目から2年目への専門性向上の検討—幼稚園での半構造化面接から—	保育学研究	新人 振り返り 専門性
9 足立・柴崎 14)	2010	保育者アイデンティティの形成過程における「揺らぎ」と 再構築の構造についての検討—担任保育者に焦点をあてて—	保育学研究	保育者アイデンティティ 成長過程 重要な他者
10 香曾我部 15)	2012	少子化、過疎化が地方小規模自治体の保育者の 成長に与える影響	保育学研究	保育者アイデンティティ 実践コミュニティ 転機 自己形成
11 香曾我部 16)	2013	保育者の転機の語りにおける自己形成プロセス	保育学研究	省察 実践コミュニティ リアリティ・シヨック 省察 専門的成長
12 谷川 17)	2013	新任保育者の危機と専門的成長 —省察のプロセスに着目して—	保育学研究	
13 中坪・秋田・増田・ 安見・砂上・箕輪 18)	2014	保育者はどのような保育カンファレンスが自己の専門的成長に繋がると捉えているのか	乳幼児教育学研究	保育カンファレンス 専門性開発
14 末次 19)	2014	「特別な支援」をめぐる保育士の解雇過程—公立S保育所の事例から—	子ども社会研究	特別な支援 解雇過程
15 上田 20)	2014	初任保育士のサトミ先生はどのようにして「保育できた」観を獲得したのか? —保育行為スタイルと価値観に着目して—	保育学研究	保育行為スタイル 初任保育者 試 行錯誤
16 衛藤 21)	2015	保護者との関係に関する保育者の語りの分析 —経験年数による保護者との関係の捉え方の違いに着目して—	保育学研究	保護者 関係性
17 上山・杉村 22)	2015	保育者による実践力の認知と保育経験および省察との関連 —日々の保育における担任保育者の保育体験 —保育者の主観的体験に着目して—	教育心理学研究	実践力 経験年数 省察 専門性の向上
18 原口 23)	2016	保育者の経験年数による「幼児理解」の視点の違い	保育学研究	主観的体験
19 佐藤・相良 24)	2017	初任保育士の経験する保護者との関わり —難しさに直面する語りの変容プロセスに着目して —保育者からみた心理専門職との協働 —経験による変化と関係性に着目して—	日本家政学会誌	経験年数 幼児理解 新人保育者 ベテラン保育者 比較
20 衛藤 25)	2018	新任保育者の成長に寄与する同僚保育者のメンタリング —振り返りノートの質的分析を通して—	保育学研究	保護者 初任保育士 変容 難しい経験
21 原口・大谷 26)	2018		保育学研究	心理専門職との協働
22 平林 27)	2019		保育学研究	メンタリング機能 初任保育者 専門性開発 研修

3. 結果

3-1. 学習に関連する概念

本稿では、学習を経験の結果としての保育者の変化として緩やかに定義しているため、その変化をどのような概念で捉えているかが多様となる。抽出された表1の各論文における諸概念を示したものが以下の表2である。

表2 保育者の変化を示す概念群

熟達（化）	成長	力量	発達	保育者アイデンティティの形成
専門性向上（開発）		（専門的）成長	自己形成	実践力の認知
		経験による変化	保育観の変容	

知識・スキル・信念の変化としての学習に関連する概念として、熟達、成長、力量、保育者アイデンティティ、自己形成、専門性の向上、専門的成長など多様な概念が確認された。これら諸概念のそれぞれについて、概念間の相互関係や経験との対応について詳細に論じることは、本稿の主眼ではない。しかし、表2からは経験の結果としての保育者の変容が多様な観点から捉えられていることが示されている。

3-2. 保育者の経験をめぐる主要テーマ

対象となった22論文を通読し、明らかになった知見を分類した結果、3つの主要なテーマを抽出した。

3-2-1. 困難を乗り越える経験

まず、外的経験としての「困難を乗り越える経験」と保育者の学習との関連を論じた一群を抽出できる。

具体的には、危機体験・困難・リアリティ・ショックなどへの着目である。このテーマに関連する研究は、12本確認された（表3）。共通するのは、保育者が困難を感じる経験を乗り越えることで保育者が成長するというプロセスが指摘されている点である。

また、これらの研究ではすべて質的研究法が採用されており、仮説生成段階であるといえるため、今後質問紙調査などによる仮説の検証が期待される。

保育者が直面した困難を乗り越えられるかどうかは、当然のことながら自明ではない。現状は、「成功例」をめぐる研究が一定の蓄積を見せている状況であるといえる。しかし、困難に直面したことで、休職や辞職を選択する保育者も多く存在すると推察される。保育者が困難に直面した際、乗り越える／挫折の分岐を左右する条件についての研究の展開と蓄積が期待される。

表3 「困難を乗り越える経験」をめぐる知見

1. 「指導に困難をきたした経験」を経た「てがかりとこつ」の獲得
3. 保育者相互の支え合いをによる保育のゆきづまりの乗り越え
5. 危機体験とアイデンティティ形成の関連
9. 落ち込み（揺らぎ）を支える職場環境（相談できる他者）
10. 実践サイクル・移動サイクルの反復の中での成長（その過程における葛藤の反復）と、それを支える実践コミュニティ
11. 転機のプロセスに埋め込まれた困難とそれを支える実践コミュニティ
12. 新任保育者の危機（リアリティ・ショック）と省察を通じた専門的成長・その条件としての時間・機会・同僚の存在
14. 特別な支援の困難を経て保育実践の多様化
15. 初任保育士のとまどい期から試行錯誤期を経て「保育できた」観の獲得
16. 保護者支援に関する難しい状況への対峙と、それを乗り越える条件としての先輩保育者・出産経験・客観的視点の形成
18. 「保育者だけが必死な保育体験」と「楽しい」が一致した保育体験の循環による成長・その条件としての良い保護者・他の保育者
20. 初任保育士の保護者支援の難しさ（対応の難しさ・精神的難しさ）とそれを支える同僚保育士の存在

3-2-2. 省察の重要性

次に、内的経験としての「省察」「振り返り」に着目した研究が多く確認できる。保育カンファレンスに着目したものも、保育者の省察を伴う活動として同テーマとして捉えた。このテーマに関連する研究は、7本確認された（表4）。

表4 省察をめぐる知見

6. 新人保育者と他の保育者との話し合いによる、新人の実践への省察への正の影響
7. 新任保育者と、先輩保育者との保育カンファレンスを通じた省察による保育実践の変容
8. 新人保育者の専門性向上にとっての振り返り
12. 新任保育者の危機（リアリティ・ショック）と省察を通じた専門的成長・その条件としての時間・機会・同僚の存在
13. 専門性の向上に資する保育カンファレンスのあり方
17. 専門性の向上に対する省察の重要性を実証的に裏付け、実践力に必要な知識・技能は経験年数に伴い獲得されるもの・省察を通して獲得されるもの・経験を重ねるとともに省察をすることで獲得するものに分類（実践力の認知を説明できる程度は「省察」>「経験年数」）
22. 「振り返りノート」の分析を通じた初任保育者への同僚保育者のメンタリング機能

これらの研究では、いずれも保育者の学習における省察の重要性が指摘されている。時系列でみれば、論文 6 から 13 までの仮説生成の段階を経て、上山・杉村（論文 17）では、量的な手法で仮説検証がなされている。保育者実践力の認知に対する相関が、経験年数よりも省察の度合いに関連していることが示されており、保育者の成長における省察の重要性が確認されている。

外的経験と内的経験は、現実の保育者の主観的経験における区別は明らかではなく、両者は分かちがたく結びついていると考えられる。1 項と 2 項に分類した論文に重複が認められる（論文 12）ように、困難を乗り越える経験と省察とは、同時に生じ得る経験でもある。ここまでの結果からは、困難を乗り越える経験と省察とが有効に機能することが、保育者の成長に寄与するという知見が導き出される。

3-2-3. 成長の条件としての同僚保育者・対象としての新任保育者

対象論文の分析から導き出されるのは、ここまで上げた 2 つのテーマ群である「困難を乗り越える経験」「省察」の条件として、「同僚保育者」の存在を指摘する研究が多い点である。ここで「条件としての同僚保育者」には、同じ園で勤務する保育者に加え、公立園同士つながりなど自治体内部の保育者コミュニティ（実践コミュニティ）に関するものも含めている。また、園内での保育カンファレンスも、実質的には同僚保育者とのやりとりが中心となると考えられるため、保育カンファレンスの機能や役割に注目したものも含めた。

「条件としての同僚保育者」の存在に注目した研究は 14 本確認された（論文 2,3,6,7,8,9,10,11,12,13,16,18,20,22）。14 本の内訳をみると、学習の主体である保育者と、同じ園の保育者による支援的関わりに関連するものが中心であり、9 本確認された（論文 3,6,7,9,12,16,18,20,22）。そして、専門家集団としての保育者集団や、公立保育士の実践コミュニティに着目したものは 3 本（論文 2,10,11）、保育カンファレンスに着目したものは 2 本（論文 8,13）確認された。

なお、初任・新人保育者を対象とした論文はすべて「困難を乗り越える経験」「省察」群に含まれ、7 本確認された（論文 6,7,8,12,15,20,22）。

これら 7 本のうち、特に初任・新人保育者に対する同僚保育者の正の影響を指摘したものは 15 を除く 6 本に及び、初任・新人保育者に対する同僚保育者の支援的関わりの重要性が多く指摘されている。初任・新人保育者への、同僚保育者の関与がその成長や「リアリティ・ショック」など直面する困難を乗り越える際に順機能するという指摘が確認できる。

困難を感じる経験、省察・振り返り、条件としての同僚保育者のいずれかに関連する研究が、本稿で分析対象となった研究全体の 9 割以上を占めており（22 本中 18 本）、これらが、現在日本の保育者の経験と成長をめぐる主要なテーマである。

国内の保育者の経験と学習をめぐる研究成果を要約すれば、「保育者の学習にとっては困難を伴う経験を乗り越えることが重要な契機となる。その際には省察の質も大きな影響

を与える。そしてこれらを支える条件としては、(特に新人保育者にとっては)同僚保育者の影響が重要である」という知見を抽出することができる。

3-3. 萌芽的段階のテーマ

以下の研究は、萌芽的段階にあり、今後の研究の余地があるテーマであるといえる。

上田ら(論文2)は、保育者の子育て経験と保育者の力量との関連に着目している。これは直接的な職業経験ではないが、現場での経験と、保育者個人のライフコース上の経験は連続性を有しているため、今後も研究課題となり得るテーマであると考えられる。こうした視点は、衛藤(論文16)でも確認されている。

原口・大谷(論文21)は、心理職との協働という、外部専門職との協働という経験による変化に着目している。これは、外部専門職との協働という外的経験による保育者への影響を検討したものである。

外的経験という観点からは、担任という経験、主任・園長という経験、「フリー」の保育者としての経験、行事の指導という経験など、タスク性質ごとの経験による学習を直接対象とした研究は見られなかった。

経験の条件への着目した研究としては、香曾我部(論文15)が、少子化、過疎化が進む自治体における経験と保育者の学習について論じている。経験の条件に関しては、同僚保育者の存在に関する研究を除き、少子化、過疎化といったマクロな構造的条件が保育者に与える影響についての同研究がみられるのみであった。こうした地政学的・社会的なアプローチに加え、現場学習の促進を阻害する構造的条件に注目した研究の余地もあると考えられる。

佐藤ら(論文20)は、経験年数による幼児理解の視点の違いについて明らかにしている。これは、経験の個人条件を検討したものである。保育者個人の信念傾向などの個人的要因に着目した研究は見られず、今後の課題である。

4. 考察—今後の研究の展望

前節までの分析結果から得られた主な知見は、以下の通りである。

第一に、保育者による経験による学習をめぐる先行研究におけるテーマは、「困難な経験の乗り越え」、「省察・振り返りの重要性」、「学習の条件としての同僚保育者の存在」の3つでそのほとんどを占めている。

第二に、これらのテーマは、「困難な経験を乗り越える」「省察」という経験を促進する条件として、同僚保育者の支えが重要であるという関係にあり、特に、初任・新人保育者にとってその重要性が指摘されている。

ここまでで明らかにした国内の研究動向を、他領域や海外の研究動向を踏まえ検討することで、「何が語られていないのか」について考察したい。

4-1. 近接領域における経験学習との関連

中原²⁸⁾によれば、経験学習の諸言説の共通点は、「1) 学習における経験・実践の重視と、2) 経験の内省」とされている。この指摘を踏まえれば、これまでの保育学は、大筋では一般的な経験学習論と共通のテーマを扱ってきたといえる。より具体的な先行研究として、国内における教師・看護師・客室乗務員・保険営業などの対人サービスの熟達過程に関する笠井²⁹⁾を踏まえ検討したい。

笠井は、「初任者」「一人前」「指導者」と職業の発達段階にわけて「熟達に役立った経験」を抽出した。そして、4職域のすべての発達段階に共通する熟達経験として、3つの要素を抽出している。その3つは、「新しい知識を得る」「信頼する熟達者との出会い」「顧客への働きかけと反応」である³⁰⁾。これら3要素のそれぞれに関連して考察したい。

まず、「新しい知識を得る」という経験は「主体的に、自律的に、内的な喜びをもって、新しい分野を学ぶ経験」と定義されている⁴⁹⁾。本稿が分析の対象とした論文では、すべて職場内でのインフォーマルな経験において、文脈に応じた知識を得ていく過程に着目されていた。しかし、保育士等キャリアアップ制度の導入に伴い、園外での研修の重要性が注目されており、公的な研修の成果検証は今後の課題であるといえる^{注3)}。

第二に「信頼する熟達者との出会い」という経験に関しては、同僚保育者の果たす役割が「主要なテーマ」として抽出されており、保育学における知見と合致する。同僚の存在が、対人サービス業に従事する者の成長にとって重要な役割を果たすという一般的な知見は、保育者についても適用できる。

一方で、同僚保育者との関係性を表す概念としての同僚性について、日本の教師について紅林³¹⁾は、①同僚との共同歩調志向が強く、独自の活動や実践を抑える、②互いの教育への取り組みや実践を介しての交流が多くない、③「プライベート重視」の傾向により同僚との関係性が希薄になるなど、必ずしもポジティブとは言えない側面を指摘している。衛藤（論文20）が同僚保育者の両義性として、初任保育士の自信喪失の要因にもなり得るとの指摘をしているものの、研究全体の傾向として、同僚性が保育者の学習に順機能する側面が過剰に強調されているとも考えられる。同僚性に関する多角的な分析も今後の課題となろう。

第三に、「顧客への働きかけと反応」によって熟達するという経験である。保育者にとって顧客は、子どもや保護者が想定されるが、原口（論文18）において「良き保護者」の存在が指摘されているに過ぎない。子どもや保護者との具体的な関わりを通して、肯定的なフィードバックは、保育者のやりがいや成長に寄与すると考えられる。こうした視点から保育者の学習にアプローチすることも今後の課題である。

4-2. 組織の学習という視点

次に、本稿の分析結果からは、先行研究が保育者個人の成長を主に対象としてきた点である。例外として、太田（論文4）において、保育者集団の発達が取り上げられているが、

直接一つの組織を対象としているわけではない。経営学において「組織学習研究が対象としてきた組織・職場・集団自体のルーチン生成や変革」³²⁾など、組織学習という視点からのアプローチはみられず、保育者個人の学習が主な焦点となっていることも特徴のひとつである。今後このようなアプローチによる保育施設全体を組織として捉える視座も求められる。

中村は、学習する組織を試行するプロセスに必要な要素として「複雑さの理解」「省察的なコミュニケーション」「志」を1つでも欠くことのできない3要素として挙げている³³⁾。これまでの保育学研究においては、すでに見た通り省察的コミュニケーションの役割に関する知見は一定の蓄積があるといえるが、「複雑さの理解」の意味する「氷山の一角として見える出来事に自分がいかに関わり、以下に変えていけるかということ」を主体的・協働的に捉える」システム思考や、保育者の志を支える「共有ビジョン」の形成条件については明らかになっていない。すでに、管理職のリーダーシップが保育者の意欲・知識・スキルに直接影響を及ぼす、との秋田ら³⁴⁾の指摘がなされていることに鑑みれば、管理職のリーダーシップが、保育者の学習という観点から経験的に捉えられる必要があるといえる。

4-3. 研修等の成果検証という課題

4-1 で考察した通り、先行研究ではおおむねインフォーマルな経験を対象としていた。しかし、すでに指摘した通り、研修プログラム等の成果検証も課題である。高濱（論文1）は、保育者の熟達するプロセスの分析から、「文脈から分離された特定の指導方法あるいはスキルの教授・訓練だけでは不十分だと考えられる」と指摘しており、間接的な研修は、構造上一定の限界を抱える可能性がある。しかし海外では、Egert et al.³⁵⁾において研修プログラムが子どものアウトカムへの寄与、Schachter et al.³⁶⁾において研修プログラムの形態別メリット・デメリットなどの成果検証に関するシステムティック・レビューがなされるほど先行研究が蓄積されている。したがって、国内においてもそれらの検証作業は急務であるといえる。

5. 結論

本稿の成果は、保育者の経験と学習をめぐる研究の現状を可視化したことである。同時に、萌芽的段階、未着手の研究課題も同時に可視化された。

全体的な研究動向として、「難しい経験」と保育者の学習、省察の条件、条件としての同僚保育者・保育者コミュニティに着目した研究が柱となって展開してきたことが明らかになった。しかし、未解明な点も多く、タスク性質としての外的経験による影響や、キャリアの発達段階毎の学習の過程、経験からの学習を促進／阻害する条件に関する研究は、萌芽的段階にとどまっていることが明らかになった。

研究の進展はテーマごとに異なるものの、経験自体の詳細な記述や機能の分析という方

向へと進展している領域もある。例えば、本稿の枠組みにしたがって分析対象から除外された研究として、特別な支援における保育者の経験に関する一連の記述的研究がある³⁷⁾³⁸⁾。これらは、特別な支援の経験の過程を質的方法で記述したものであるといえるが、保育者にとって、その経験がどのような学習へとつながったかという学術的な文脈に位置付けられていない。また、内的経験としての省察過程の記述的研究³⁹⁾⁴⁰⁾⁴¹⁾も同様である。これらの研究群を、保育者の経験と学習という研究の文脈に位置づける視座も重要であるといえるだろう。

本稿は、国内の査読付き論文における保育者の経験と学習の到達点を示すものであり、本稿の限界は、分析した論文を選択した基準による。大学の研究紀要等は除外しているため、それらの報告中での成果は当然捨象されている。本稿の成果を踏み台に、多様な媒体における研究成果を対象に含めることで、より堅牢なレビューを得られるだろう。保育者の経験と成長に関する研究の一層の蓄積が俟たれる。

注

(1) 福島は、以下のように述べる。「仕事の現場というのはリアルタイムで出来事が進行していて、そこで学習に必要なある種の猶予、つまりちゃんと立ち止まって考え直したり、わからないところを繰り返し試してみたり、あるいは適当なタイミングで先輩や指導者に、適度の指導を受ける、といったチャンスは限られている…(中略)…またもっと大きいのは、新人が失敗し仕事に大きな穴を開けたとすると、その失敗のコストは直接組織に跳ね返ってくるから、技能の低い新人には仕事を任せたくないという傾向である」⁴²⁾

(2) 表 1 における研究キーワードは、各論文の著者によって挙げられたものとは限らない。本稿の枠組みにしたがって挙げられたものも含まれている。また、本文中で表 1 に記載の論文に言及する際には、表 1 の論文番号を示す。

(3) 保育学研究第 58 号の特集(テーマ: 保育の場における現職教育のあり方について)は、こうした議論に深く関連すると考えられる。本稿草稿の投稿段階では、第 58 号の特集論文を分析対象に含めることができなかった。キャリアアップ研修等の効果的な手法等の開発や、経験的データに基づく成果検証などは、今後の課題であるといえる。

引用文献

(1) Avalos, Beatrice (2011) Teacher professional development over ten years. *Teaching and Teacher Education* 27, 10-20.

(2) 松尾睦 (2006) 経験からの学習—プロフェッショナルへの成長プロセス—. 同文館出版. 10.

(3) 福島真人 (2010) 学習の生態学—リスク・実験・高信頼性. 東京大学出版会. 146-147.

(4) 前掲 (2), 178.

(5) 高濱裕子 (2000) 保育者の熟達化プロセス: 経験年数と事例に対する対応. 発達心理

学研究, 11 (3), 200-211.

(6) 同上

(7) 上田淑子・澤田忠幸・赤澤淳子 (2007) 子育てをする保育者の仕事と家庭の関係ーとくに子育てが保育力量に及ぼす影響についてー. 乳幼児教育学研究, 16, 15-22.

(8) 野本茂夫 (2008) 保育者が保育のゆきづまりを乗り越えるときー保育実践における保育者相互の支え合いの意味ー. 保育学研究, 46 (2), 53-64.

(9) 太田光洋 (2008) 専門家としての保育者集団の発達を支えるものー地域子育て支援活動の取り組みにみる保育者の相互支援ー. 保育学研究, 46 (2), 43-52.

(10) 足立里美・柴崎正行 (2009) 保育者アイデンティティの形成と危機体験の関連性の検討. 乳幼児教育学研究, 18, 89-100.

(11) 金玟志 (2009) 新人保育者による省察の意味とその変容を支える支援のあり方ー保育実践後の保育者間の話し合い対話の中からー. 保育学研究, 47 (1), 66-78.

(12) 溝口綾子 (2009) 新任保育者の保育実践における課題意識と省察に関する研究ー保育カンファレンスの分析を通してー. 教材学研究, 20, 235-244.

(13) 山川ひとみ (2009) 新人保育者の1年目から2年目への専門性向上の検討ー幼稚園での半構造化面接からー. 保育学研究, 47 (1), 31-41.

(14) 足立里美・柴崎正行 (2010) 保育者アイデンティティの形成過程における「揺らぎ」と再構築の構造についての検討ー担任保育者に焦点をあててー. 保育学研究, 48 (2), 107-118.

(15) 香曾我部琢 (2012) 少子化、過疎化が地方小規模自治体の保育者の成長に与える影響. 保育学研究, 50 (2), 112-125.

(16) 香曾我部琢 (2013) 保育者の転機の語りにおける自己形成プロセス. 保育学研究, 51 (1), 117-130.

(17) 谷川夏実 (2013) 新任保育者の危機と専門的成長ー省察のプロセスに着目してー. 保育学研究, 51 (1), 105-116.

(18) 中坪史典・秋田喜代美・増田時枝・安見克夫・砂上史子・箕輪潤子 (2014) 保育者はどのような保育カンファレンスが自己の専門的成長に繋がると捉えているのか. 乳幼児教育学研究, 23, 1-11.

(19) 末次有加 (2014) 「特別な支援」をめぐる保育士の解釈過程ー公立 S 保育所の事例からー. 子ども社会研究, 20, 47-60.

(20) 上田敏丈 (2014) 初任保育士のサトミ先生はどのようにして「保育できた」観を獲得したのか?ー保育行為スタイルと価値観に着目してー. 保育学研究, 52 (2), 88-98.

(21) 衛藤真規 (2015) 保護者との関係に関する保育者の語りの分析ー経験年数による保護者との関係の捉え方の違いに着目してー. 保育学研究, 53 (2), 84-95.

(22) 上山瑠津子・杉村伸一郎 (2015) 保育者による実践力の認知と保育経験および省察との関連. 教育心理学研究, 63, 401-411.

(23) 原口喜充 (2016) 日々の保育における担任保育者の保育体験－保育者の主観的体験に注目して－保育学研究, 54 (1), 42－53.

(24) 佐藤有香・相良順子 (2017) 保育者の経験年数による「幼児理解」の視点の違い. 日本家政学会誌, 68 (3), 103－112.

(25) 衛藤真規 (2018) 初任保育士の経験する保護者との関わり－難しさに直面する語りの変容プロセスに着目して－. 保育学研究, 56 (3), 149－159.

(26) 原口喜充・大谷多加志 (2018) 保育者からみた心理専門職との協働－経験による変化と関係性に着目して－. 保育学研究, 56 (3), 126－136.

(27) 平林祥 (2019) 新任保育者の成長に寄与する同僚保育者のメンタリング－振り返りノートの質的分析を通して－. 保育学研究, 57 (1), 67－78.

(28) 中原淳 (2013) 経験学習の理論的系譜と研究動向. 日本労働研究雑誌, 638, 4－14.

(29) 笠井恵美 (2007) 対人サービス職の熟達につながる経験の検討－教師・看護師・客室乗務・保険営業の経験比較－. Works Review, 2, 50－63.

(30) 同上

(31) 紅林伸幸 (2007) 協働の同僚性としての<チーム>－学校臨床社会学から－. 教育学研究, 74 (2), 36－50.

(32) 高橋平徳 (2015) 現場における学習研究の現状と課題. 経済学研究, 65 (2), 3－32.

(33) 中村香 (2011) 成人の学習を組織化する省察的实践－学習する組織論に基づく－考察－. 教育学研究, 78 (2), 26－37.

(34) 秋田喜代美・淀川裕美・佐川早季子・鈴木正敏 (2016) 保育におけるリーダーシップ研究の展望. 東京大学大学院教育学研究科紀要, 56, 283－306.

(35) Egert, Franziska, Fukkink, Ruban G., Eckhardt, Andrea G. (2018) Impact of In-Service Professional Development Programs for Early Childhood Teachers on Quality Ratings and Child Outcomes: Meta-Analysis. *Review of Educational Research*, 88 (3), 401－433.

(36) Schachter, Rachel E., Gerde, Hope K., Hatton-Bowers, Holly (2019) Guidelines for Selecting Professional Development for Early Childhood Teachers. *Early Childhood Education Journal*, 47, 395－408.

(37) 松井剛太・越中康治・朴信永・若林紀乃・鍛治礼子・八島美菜子・山崎晃 (2015) 保育者は障害児保育の経験をどのように意味づけているのか. 保育学研究, 53 (1), 66－77.

(38) 垂見直樹・橋本翼 (2017) 「特別な支援」の受容に伴う保育現場の組織変容の萌芽－私立保育所におけるフィールドワークから－. 保育学研究, 55 (1), 43－54.

(39) 佐藤智恵 (2011) 自己エスノグラフィーによる「保育性」の分析－「語られなかった」保育を枠組みとして－. 保育学研究, 49 (1), 40－50.

(40) 上田敏丈 (2011) 保育援助に対する幼稚園教諭のふりかえりプロセス－異なるティーチング・スタイルに着目して－. 乳幼児教育学研究, 20, 47－58.

- (41) 吉村香 (2012) 保育者の語りに表現される省察の質. 保育学研究, 50 (2) , 64-74.
(42) 前掲 (3) 178.

付記：本稿の内容は、日本保育学会第4回九州沖縄ブロック研究集会（2020年3月）における発表に基づき、加筆・修正を加えたものである。